
ツンツンでデレデレな二人の恋愛

D E G

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツンツンでデレデレな二人の恋愛

【Nコード】

N2139E

【作者名】

DEG

【あらすじ】

二人はツンデレである。ツンデレとツンデレが恋愛をしたらどうなるのか？鬱陶しい位の純愛のくせに、ツンツンして表に出そうとしない二人のデレデレな一日の話。

（前書き）

現実では有り得ない二人の話です。こんなツンデレって実際いないと思います。

ツンデレとは、普段は冷ややかな非友好的な人間性を思わせながら、本性を見せた時には、超優しいとか温かいとか可愛いとか、そういう普段と違う面が際立って映るのが魅力的な奴の事である。

巷では『萌え』とかいう感情を彷彿させるトップファイブに上がる性質らしい。が、それはどうでもいいか。

ここに二人のツンデレがいる。

男と女、それぞれ一人ずつ。両方がツンデレである。

別にツンデレは女だけではない。男にだってツンデレはいる。

「おい高倉」

「うるさいわね！何か用なら早く言って頂戴！」

高飛車に声を出したのは高倉と呼ばれた女の子。

髪は黒いセミロング、しかし左肩の少し上で括って前に垂らしている。

「あ、そ。部活行くのか聞こうと思っただけ」

男の子の方は、少し髪の立った以外は標準的だ。高倉にぴしゃりと

言われると、彼もさらっと用件を口にした。

「…そんなの山野一人で行きなさいよ。…私は、課題やっちゃわなきゃいけないんだから」

山野に向かって言い放つ高倉。

放課後の高校の教室内には彼等しかない。掃除当番も既にいなくなっている。

山野は教室の扉のところで高倉に声を掛けていたが、彼女の机に近づいてくると前の席に座った。

「…じゃあ手伝ってやる」

「え？」

「別に、早くしないと部活遅れるだろ。お前のためじゃない」

顔を合わせずに素早く言い切る山野。

彼はツンデレである。

「そ、そんな手伝いなんて無くても出来るわよ！……まあ…いいけどさっ」

言葉の尻を吃らせる高倉。

彼女もツンデレである。

さて、端から見ればラブラブハツラツなバカップルな二人だが。

別に付き合ってるわけじゃない。

彼等は、かといって自分達がただの友達同士である……とも思っていない。

何しろツンデレだ。

『ツン』が彼等を邪魔するのだ。

高校二年生の思春期二人、入学当初から同じ部活である。互いを意識しないわけではない。

そして実際彼等は立派過ぎるほどの両想いである。

だが彼等の能力、『ツンデレ』によって互いのそれが明らかにすることがないのだ。

「……よし、出来た！」

「遅いな、もっと早く出来るだろ」

「な、何よ！山野が手伝ってくれたからこんな早く……」

と、高倉は途中でハツとして口をつぐんだ。

「べ、別に俺は……」

「わ、私だって、感謝なんかしてないわよ」

「……………」

「……………」

「…………。部活、行くぞ」

「い、今行こうと思ったのよ!…待っててよ」

「…一緒に行ってやるんだから、早くしろよ」

両者、見事に墓穴を掘って御臨終。

ツンデレは無限ループの如く彼等の関係に渦巻くのだ。

所謂友達以上恋人未満。

そんな関係が心地良いのかどうかは知らないが、それが二人の長い長い間定着した間柄だった。

二人は同じ弓道部だ。

山野と高倉が二人で鍛練場に入ると、まず先にいた先輩が声をかけてくる。

「遅いぞ……ってうわ、毎度見せ付けるな山野！」

端から見れば二人は十分に恋人同士である。が、山野はツンとして言った。

「別に、こいつはそんな関係じゃありませんから」

「わ、私だつてあんたとなんかごめんよ！」

ふいつと互いにそっぽを向く二人。

こんなだから周囲も嫉妬するまでもなく、愉快にこの痴話喧騒を見ているのである。

「ははは。面白いなお前ら。ほら早く着替えろよ」

そう言つて先輩は行つてしまふ。残された二人は微妙な空気のままである。

「……………」

「……………」

二人は何も言わずに顔を見合わせ、見合わせるとまたそっぽを向いた。

ツンデレとは全く、油を注さねば噛み合わない歯車のようなのだ。

「……ねえ」

「何だよ」

二人は部活で汗を流した後、帰路を共に歩いていた。よくある夕方の河川敷。正に青春の舞台だ。

これも偶然か、二人の家はかなり近所なのだ。

帰宅時間も同じなので、どちらからともいうわけではなく、いつの間にか二人は二人で一緒に帰るのが習慣となっていた。

「昨日さ、山野はチョコレートとかもらったの？」

極めて自然にそう言う高倉。

ちなみに昨日は二月十四日。俗にバレンタインデーと言われるチョコレート祭の日である。

「…いや、貰ってねえ」

「ふ、ふーん。そう」

高倉は今度は何故か少し緊張し始めた様子になる。

無論、山野とて意識していないわけではない。高倉からチョコレートを貰えたら彼は狂喜乱舞するつもりだった。家で。

だが昨日に貰えなかったのでもはや彼は絶望していた。なので、そ

の勝手な怨みを少し込めながら彼は高倉を皮肉った。

「高倉は、誰かにあげたりしたのか？まあ、去年はあげる奴もいなかったもんな」

「ちよっ……うるさいわねっ！去年は別に好きな人なんかいなかったし！ていうか別にそんなの、要らないし……！」

ぶつぶつ言っていた高倉は段々と声を小さくしていき、いつしか立ち止まってしまった。

「…何だよ？」

「……………」

山野は振り向いて高倉を見た。

何か気に障ることを言ったかと心配になった。

「……………はい」

「…………？」

が、よく見ると高倉は凄まじいまでに顔を赤らめていた。

夕日が彼女の横顔を、そして差し出す手を照らす。

「……え……」

「……………早く受け取りなさいよっ！」

かわいらしいリボン柄の紙袋の中に入っているであろうものは確実にチョコレートである。

山野は一瞬喜びで破裂するかと思った。

そして高倉は恥ずかしさで爆発するかと思った。

先程『好きな人なんかいなかった』発言をしてしまったために、今チョコレートを渡すというのはその人が好きである、という事実に結び付けるのが自然な流れとなってしまったのだ。

互いにそれを解って察しているから尚口に出来ない。

山野は黙ったまま素直に高倉のチョコレートを受け取った。

「……………別に、有り難いなんて思ってねえからな」

「…は？」

「こんなもの、高倉から貰って当然だろ」

山野は苦し紛れにそんな事を言った。

これには高倉も少し気に障った。

「ちょっと、何それどういう意味？」

「どつって、だから、そのままだよ」

少し照れながらそう返されて、高倉は気付いた。

ずっと前から自分の気持ちは知られていたのだ。

しかし、やはり彼女もツンデレである。

「な……何よそれっ！？別に私はあんたのこと好きとかそんなんじゃないもん！」

言われた山野も、これにはムツときて言い返した。

「お、俺だって別に、お前のこと嫌いな訳じゃねえよ！」

そして同じくツンデレな彼は墓穴を掘った。

思わせぶりで遠回しな言い方になんとも反応出来ず、高倉は「なっ」と短く声を漏らして口をぱくぱくさせた。

山野も我に返り、慌てながら言葉を紡いだ。

「あつ、いやあの……だからさ、その………本当は嬉しいんだよ、これ、もらえて……」

「え……あ、えつと………いいの、私も、あげたかったから……」

正に誘爆。

火薬を使い切った二人はもじもじしながらしばらく黙っていた。

「……………食べていいか？」

「あ、うんっ」

山野は河川敷に座り込み、袋を覗いた。

無骨な形のチョコレートのお菓子がいくつか入っていた。

「あの……あんまりうまく出来なかったから……」

「いやそんなことないよ、美味しそうだ……あの、一緒に食べないか？」

「え？……うん、わかった」

高倉も素直に山野の隣に座る。

二人は一緒に無骨なチョコレートを食べた。無言だった。

先に家に着くのは高倉である。

チョコレートを美味しく二人で食べてから、何故かお互いに何もしやべらなかった。

しかし高倉の家の前で別れるとき、山野が口を開いた。

「お返しが欲しいなら、作ってやってもいいぞ」

いつも通りのツンツンした口調だった。

なので高倉もこう返した。

「別に、山野が作ってくれるなら食べてあげてもいいけど？」

「……………じゃあ、作ってやるよ」

山野の答えに高倉は一瞬驚いた。

「勘違いすんなよ。貸し借りゼロにするためだ」

「……………。そんなんで、借り返せると思ってるの？」

「え？」

高倉は山野に一步近づいた。が、体はあまりの緊張に震えていた。

「私のチョコレートは高値なんだから、た、足りない分、今、その……………」

「え？お、ちょっ高倉」

高倉はさらに山野に近づく。それこそ山野の鼻息が彼女にかかる位置までである。

二人共々激しく鼓動が鳴り響いていた。

「は、払いなさいよっ！」

「い……………う……………わ、わかった、よ……………」

山野は震える手で迫る高倉の肩を持った。

高倉は何かを覚悟したように目を閉じている。

もちろんここは互いの唇を合わせるのが妥当な流れである。しかし山野にはどうしてもそれが出来る気がしなかった。

いわゆる『キス』というものを交わすことで、互いの今の関係が何か曲がってしまう気がした。

「……………」

なんだか申し訳ない気もしたが、山野は高倉の額に唇を付けた。

高倉は驚いて目を開けた。

「……………ふんっ、意気地無しっ」

「う、うるさいな」

内心、高倉もどこか安心したような心持ちだった。その理由はわからなかったが、こうしてツンツン喋れるのがよかった。

「ま、いいわ。これとお返してチャラにしてあげるわよ」

「……………そりゃどうも」

山野は高倉の肩を離し、背を向けた。

「言つとくけどな、俺のお返しだって、めちやくちや高いんだからな」

「えっ……」

と、山野は再び振り向いて高倉を見た。が、顔が赤い。

「こ、こんなんで、俺の分が返し切れと思うなよ！」

なんともヘタレな発言である。

言い残すと、山野はすたすた歩き出した。

そのまま帰ってしまいそうな後ろ姿に、高倉は思わず叫んだ。

「バーカッ！そんなの、いくらだって返してやるんだからっ！」

ピタリ、と山野が止まる。

高倉もハツとした。大胆といえば超大胆な言い方だ。彼女は慌てて言い繕おうとした。

「べっ、別に、借りをつくるのが嫌ってだけで、あんただから別にいいって言うか…あああじゃなくって…」

後ろから聞こえる高倉の声に、山野は硬直していた。

さっきから単純に『好き』とか言われるより直球なことばかり言われているのだ。ツンデレとはそういう性質なのだから。

山野自身、自分の気持ちもぶちまけてしまいたかったが、やはりそれは出来なかった。

「ふんっ、なら、ちゃんと返してもらっからな」

「わ、わかってるわよ……」

それがツンデレの性質なのだから。

「……じゃあ、な」

「…うん、また、ね」

互いに顔を火照らせて別れを言う。

この関係がツンデレな二人の、一番居心地のいい関係なのである。

彼等はいつか恋人同士になるのか？

否、とつくになっっているんだから、これ以上二人のツンツンデレデレな関係は、変わらないんだからねっ。

(後書き)

ツンデレって、正直ですホント。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2139e/>

ツンツンでデレデレな二人の恋愛

2010年10月8日22時27分発行